進化する映像情報メディア

講演日：2006年5月20日（土）

場所：機械振興会館ホール

正会員 原 島 博†

1. は じ め に

原島でございます。これから少しばかり時間をいただいて、「進化する映像情報メディア」というタイトルで特別講演をさせていただきます。

会長の最後の仕事としての特別講演は、この学会の昔からのおもしろい伝統ですが、大学で言うと、一種の最終講義のようなものかなと思います。大学の最終講義は、それまでの個人的な回顧も含めた講演になることが多いので、ここでも私と映像情報メディア（学会）との関わりを中心にお話をさせていただきます。個人的な話になることをどうぞお許し下さい。

2. 0代（10歳まで）は芸術家、10代は哲学少年

ということで、まずは自分自身の経歴から・・・

私は、1945年9月12日、東京で生まれました。一応、戦後生まれですが、危ないところで戦中になるという、そういう年代でございます。昨年秋にめでたく還暦になりました。

実は私の60年の経歴にはほとんど面白いものがありません。今から42年前に18歳のときに大学に入りまして、そのあと、ずっと同じ大学にいて、まだ卒業しておりません。その意味で、経歴も「1945年生まれ→現在に至る」以上のことは言えないのであります。

もちろん60年の間には、それぞれの時代の人生がありました。恥ずかしいのですが簡単に紹介させていただきますと、まず10歳まで、実は両親は、この子はアーティスト、芸術家になると思っていたらしいのです。私自身はそういう意識はなかったのですが、かなり後になって晩年の母親からそういうことを聞きました。幼稚園のときに描いた絵を母親が保管していました。図1がそれです。「かみさま」というタイトルがついています。図2(a)は、私の幼少の頃（幼稚園に入る前）の写真です。

このようにアーティストになるかも知れなかった私ですが、10代になって強烈な反抗期を迎え、親から与えられたものはすべて拒否するようになりました。アートもほとんどやめました。代わって、哲学、宗教学、心理学の本を読

図1 かみさま（幼稚園時代の絵）

(a) 0代（3歳頃）

(b) 10代（中学校時代）

図2 原島写真

みあさりました。いわば哲学少年としての10代です。カントの純粹理性批判や実践理性批判も、一応読んだことになっています。内容はまったく覚えていませんが。図2(b)は、10代（中学校時代）の時の写真です。哲学的な思索にふけていそうな写真を選んできたのですが、単に電車の中で眠ただけかもしれません。

実は、テレビジョン学会と私のつき合いは、私の10代のとき、小学校のときに始まりました。私には父親がおりまして、皆さん全員おられるでしょうが、その父親は原島治といいまして、日本電気で真空管の研究をしていました。ちょうど私が10歳のときに「真空管」という本を岩波全書から出してあります。

† 東京大学

"Image Information Media Are Now Evolving" by Hiroshi Harashima
(The University of Tokyo, Tokyo)

図3 テレビジョン学会誌（1959年第2号）

この本をまとめたあと、1955年頃からイメージ管などの赤外線応用電子装置、光増幅器、エレクトロルミネセンス（EL）などの映像関連の研究をしていました。その頃の私の家の表札はELでした。

学会にも関係していて、私が13歳のときにテレビジョン学会の編集長をしています。まだ日刊工業新聞社から出版されていた頃ですが、父親は雑誌の送り先を自宅にしていたらしく、私もときどきテレビジョン学会誌を見ていました。小学校のときでしたが、父親が「今度、テレビジョン学会の表紙をこのように変えた。テレビジョン受像機のイメージがそのまま表紙になっている。いいだろう」と、自慢げに語ってくれたことを、いまでもはっきり覚えています（図3）。

3. 父親の急逝、そして研究者としての20代、30代へ

そのような父親でしたが、私が21歳のときに急逝してしまいました。今からもう40年以上前ですので、父をご存じの方はいまでももちろんほとんどおられないと思います。まだ私が大学生のときでした。21歳の私にとって、父親を失ったことは大きな人生の転機になりました。まだまだヨチヨチ歩きの未熟な少年（現在でも未熟ですが）に、父親から強引に人生のバトンタッチをされたという感じでした。

結局、哲学少年は大学では父親と同じ電気系の学科で学ぶことになり、父親が亡くなって1年後に、東京大学電気工学科の宮川洋教授に卒論生として教えを受けることになりました。大学院も同じ研究室で、比較的数学に近い情報理論、通信理論の研究に没頭しました。これが私の20代でした。

30代も、引き続いて助教授として宮川教授と一緒に研究させていただきました。宮川洋教授は、もともとは情報理論、符号理論の権威でしたが、画像の分野でも、1959年に多次元標本化定理を世界で初めて提案するなど、多くの貢献をされました。テレビジョン学会でも、副会長などの各種の役職を歴任されております。

この宮川先生も、1985年、私が40歳のときに、バンコクで急逝されました。私の父親が亡くなったのが54歳、宮川先生が53歳。2人の恩ある方が同じような年齢で亡くなったことは、言い尽くせないショックでした。運命的なものを感じました。

私が21歳のときの父親の死は、私が人間として一人前になれるというメッセージでした。40歳にして、宮川先生が亡くなられたことは、研究者としてそろそろ一人前になれるというメッセージであると、私は思いました。

宮川先生は、私にとって非常に大きな存在でした。宮川先生と同じことをしていたのでは、とてもかなわない、一人前になれる。自分なりの新しい領域を立ち上げなければいけない、まさに私の転機でした。

4. 新分野開拓に情熱を傾けた40代

こうして、私の40代は、もっぱら自分なりの新しい研究分野を立ち上げることに全精力を傾けた10年になりました。従来の常識にとらわれずに、新しい通信のイメージを考えてみようというわけです。

たまたま研究室に相澤清晴君（現在東京大学教授、本学会元総務理事）という優秀な博士の学生がいて、宮川研究室OBの齊藤隆弘先生（現在神奈川大学教授、本学会編集長）とともに、最初に始めた研究が「知的画像符号化」です。これは、第1回の画像符号化シンポジウム（PCSJ86）で相澤君から発表されました。

簡単に説明すると、図4のように信号を波形のまま符号化するのではなく、波形を知識（モデル）に基づいて分析して、その結果得られたパラメータ情報だけを符号化して相手に送る。送信側と受信側で知識を共有していれば、受信側で、また知識を使って信号を再合成できるのではないかということです。

たまたま当時はテレビ電話の符号化が話題になっていたもので、そこで映っている顔画像を対象とすることにしました。顔画像の場合は、例えば知識として、1枚顔写真を先に相手に送って、それを送受信端で蓄えておけば、その1枚の顔写真がどう動いたか、あるいはどう表情を変えたかという情報だけを符号化すればいいのではないか。そういう発想の研究でした。送信側ではコンピュータビジョン技術、受信側ではコンピュータグラフィックス技術を駆使して、それを符号化でブリッジするという、当時としては（おそらくは今でも）思い切った研究でした。当時のビデオが残っていますので、それをお見せします（図5）。

図4 顔画像の知的符号化

図5 モナリザの表情映像

この知的画像符号化の研究は、最初は分析情報だけを送れば、かなり大幅な情報圧縮ができるだろうということで始めました。しかし、この符号化の本質は情報圧縮ではないということに関係者はすぐ気づきました。

すなわち、知的画像符号化の本質はむしろ映像の構造化である。情報圧縮は、構造化した結果のたまたま一つの効果に過ぎない。映像が構造化されていれば、映像そのものに対していろいろな知的処理が可能になる。それを通信に使うことによって、従来の、単に信号・波形を伝達するだけの通信から、意味・内容にも立ち入った知的な通信も可能になるのではないか・・・

5. 知的コミュニケーションへ

いろいろと議論が発展した楽しい時代でした。学会では「知的コミュニケーションと符号化研究会」(第3種研究会)を電子情報通信学会で立ち上げました。

合宿もして徹夜で議論しました。知的コミュニケーションは、英語では何と言うのだろう。そこから知的コミュニケーションの意味づけができるのではないか。

例えば、「Intelligent Communication」。これは「頭がよい

便利な通信」という意味になります。これに対して「Knowledge-based Communication」とすると「知識を積極的に活用する通信」になります。「Semantic Communication」もあるかも知れません。これは「意味・内容に立ち入った通信」です。

議論はさらに発展しました。人間が知的だといわれるのは、頭がいいからなのか、知識を利用しているからなのか、意味・内容も理解しているからなのか。必ずしもそうではないのではないかと。人間が本当に知的なのは、自ら成長するからなのではないか。その立場からは、みずから成長・進化するような仕組みを持っている通信、これを知的コミュニケーションと呼ぶべきではないか・・・

これは言いかえると、それを使っている利用者が自分で創意工夫できる通信ということになります。利用者がみずから創意工夫できれば、恐らくそれは、金儲けしようという方向に向かうでしょう。「儲かる通信」です。これからの通信は、単にコミュニケーションするだけではなく、ビジネスがそこで育つ仕組みを持たなければいけない。そのような議論をしました。

6. ブロードバンド料金無料化論

電子情報通信学会でブロードバンドとATMの将来を探ろうというシンポジウムがあったときに、ブロードバンド料金は無料化すべきだと主張したのもその時期でした。1992年ごろでございます。

当時は、デジタルはビット課金が原則だけれども、それでは音声の1,000倍くらい情報量がある映像はとても商売にはならない。では情報量の対数に比例させようかというような議論が行われていた時代です。

そのようなときに、ブロードバンド料金は思い切って無料にすべきであるという提案でした。これは簡単に言ってしまうと、例えば、ネットワークをデパートと考えれば、デパートで入場料を徴収し、中を歩いているとメーターがどんどん上がるような仕組みにしては商売できるはずがない。デパートの入場料は無料にする。中を歩くのも無料にする。そうしておいて多くの人を呼び寄せてビジネスをする。ビジネスが盛んになれば、自然にデパートも栄える。ネットワークも同じではないかという考え方です。

7. ヒューマンコミュニケーションと顔

「ヒューマンコミュニケーション」というキーワードも提案しました。通信の端末は通常は電話機とかファクシミリを指すが、本当の端末は人間なのではないか。人間と人間のコミュニケーションをサポートするという立場から、これまでの通信技術をもういちど見直すべきではないか、というメッセージが「ヒューマンコミュニケーション」です。

同じことを考えていた研究者が集まって、先ほどの「知的コミュニケーションと符号化の研究会」の発展として、

1990年に電子情報通信学会でヒューマンコミュニケーション研究専門委員会を発足させました。これは、1995年に電子情報通信学会がソサエティ制になったときに、ヒューマンコミュニケーショングループという形に発展して現在に至っています。

これが私の40代でした。通信(コミュニケーション)技術を中心にお話ししてきましたが、これにちょうど並行する形で、たまたま知的画像符号化で人間の顔を対象にしたことがきっかけとなって、顔そのものの研究も行いました。これは研究室から見れば副産物だったわけですが、顔画像処理の研究は感性情報処理の一分野として発展しました。また、1995年には、日本顔学会が発足しました。いまでは会員が1,000人近い学会に発展しています。

8. 未来型テレビとは？

そう言えば、今日は映像情報メディア学会の講演でした。40代のときに、放送の将来像についてどのように考えていたかもお話ししましょう。

1989年から2年間、未来型テレビ研究会というのがあって、座長としてお手伝いをしました。当時の日本はハイビジョンをどうやって普及させるかということに必死になっていました。郵政省でも、ハイビジョンを普及させるためにポストハイビジョンを議論することがタブー視されていた時代です。

そのような時こそ未来のテレビジョンの方向性を探らなければいけないということで、郵政省の外部への委託研究(電気通信政策総合研究所が受託)という形で発足したのが「未来型テレビ研究会」です。

この研究会を始めたとき、研究会外部のおおかたの予想は、ポストハイビジョンは立体だろうということでした。ところが、議論の結果は立体ではありませんでした。研究会の結論は、ポストハイビジョンは立体化ではなくて、むしろインテリジェント化であろう。そのインテリジェント化を実現するための前提としてデジタル化が必要であり、並行してパーソナル化、ネットワーク化が進むだろう、そういう結論でした。

この議論は、当時の郵政省放送行政局長の私的諮問研究会という形で、テレビジョン放送高度化研究会(確か大越先生が委員長でした)に引き継がれました。そしてちょうどその時に、アメリカから、テレビ放送が全デジタル化できそうだというニュースが舞い込んできました。それが黒船なのか蜚気楼なのかという議論もありましたが、結局世の中は急速にデジタル化へ向かって進んでいきました。未来型テレビ研究会は、その露払い的な役割を果たしたわけです。

あわせて、テレビジョン学会でも、デジタル化を前提としたインテリジェント化の方向を探るために、「インテリジェント映像メディア研究専門部会」が発足しました。

9. そして50代、学際的な組織作りへ

40代の話が長くなってしまいましたが、私にとってそれは研究者人生で一番楽しいときでした。新しい時代が来るという予感があって、その予感を関係の方々と共有することができて、いろいろな議論ができました。そして次から次へ新しいコンセプトが生まれてきた時代でした。

これに対して、そのあとの50代は、逆に私にとっては人生で一番大変な10年間になりました。コンセプトを提唱するだけでなく、それを実現するための組織作りにかかわってしまったからです。

まず最初に、学際的な学会作りのお手伝いをしました。具体的には1995年に発足した日本顔学会と、翌年の1996年に発足した日本バーチャルリアリティ学会です。

顔学会は最初の10年間は私の研究室に事務局をおいて運営しました。現在会長をつとめています。バーチャルリアリティ学会は、東京大学の館 暉教授が初代会長となって発足し、私は二代目の会長をこの3月まで5年間つとめました。

学会の設立もそう簡単なことではありませんが、それ以上に大変だったのは、大学の組織改革でした。具体的には、2000年に東京大学で設立された「情報学環」という大学院組織の発足のお手伝いをしました。いま私はここに属しています。

情報学環は、文系や理系にまたがる学際的な大学院組織です。河口洋一郎先生のようなアート系の教員もいます。いままでの大学の組織名はほとんどすべて分類用語でできていました。学「部」とか研究「科」とか学「科」とか、いわば縦糸です。そこに横糸を通してみよう。名称も分類用語ではなく、むしろ「環」というような逆の名前をつけようということで発足したのが情報学環です。

そしていま、この情報学環が中心になって、学内の関連の先生方の協力を得て、科学技術と芸術文化を結ぶ新しい教育組織の整備を進めています。そして私のかかなりの時間を費やしています。

そこでのキーワードは「コンテンツ」です。とりあえずこの分野の緊急の人材育成を目的として、2004年に、東京大学で「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」が発足しました。5年間の時限プロジェクトですが、東京大学の副教育プログラムとして、毎年学内外から40名の履修生を受け入れて教育しています。このプログラムは、新聞でも大きく報道されました。いま私が代表をしています。

10. 文化の創造へ向けたコンテンツの時代へ

ここで、「コンテンツ」について、その重要性を少しアピールしておきましょう。映像情報メディア学会でも「デジタルコンテンツシンポジウム」が昨年から開催されています。

このような図があります(図6)。デビッド・C・モシュラ著の『覇者の未来』¹⁾という本にのっている図です。ITの主

図6 ITの進化¹⁾

役が年とともに変わってくることを表しています。

横軸は1976年から2030年までにわたっての年代、縦軸はITのユーザ数です。これによると、1980年ごろは「システム中心」、つまりIBMに代表される大型コンピュータの時代でした。それが、1980年代後半から、「PC（パーソナルコンピュータ）中心」になりました。IBMに代わって、例えばマイクロソフトがITのリーダーシップを握るようになりました。

これに続いて、1990年代半ばから急に出現したのがインターネットです。「ネットワーク中心」の時代が到来しました。そこではグーグルやヤフーがリードしています。

そして今、2006年ですが、少しずつ最後の山が立ち上がろうとしています。「コンテンツ中心」の時代の到来です。『覇者の未来』は、1997年に書かれていますが、その先見性には驚かされます。

私はこの図を次のように解釈しました。いまはネットワークの時代である。しかしそれは次のコンテンツの時代へ向けたインフラの整備に他ならない。ITの最終的な目標は、インフラとしてのPCやネットワークではなく、その次に到来するコンテンツの時代なのであると。

もちろん、この図が示しているコンテンツは、かなり広い意味を持っています。必ずしもいま注目されている映画やアニメ、ゲームだけではなくありません。私は、映画やアニメ、ゲームなどのコンテンツをパッケージ系コンテンツと呼んでいます。コンテンツはそれだけではなく。

テレビ放送で言えば、電波がメディアで番組がコンテンツです。パッケージ系コンテンツは、いわばドラマです。テレビ放送はそれだけではなく。放送というメディアの特徴を活用したバラエティなどもあります。ネットワークの時代も、それに類したネットワーク系のコンテンツが出てくるでしょう。ブログやSNSなど、WEB2.0として注目されているものは、そのほしりかもしれません。

放送では報道という重要なコンテンツもあります。これはネットワークでも、いわば実時間の実世界コンテンツとして登場してくるでしょう。さらに言えば、40代の時に議論していたネットワーク上のメディアビジネス、これも立

派なコンテンツです。私は、このようなコンテンツも含めて、これからはコンテンツの時代であると信じています。

このようなITの流れは、次のような言い方もできるでしょう。コンピュータが主役であったころは、ITは道具でした。大型コンピュータは企業のビジネスの道具、パーソナルコンピュータは個人の活動の道具でした。それが、ネットワークが主役になることによって、単なる道具ではなく、ITは社会のインフラ、基盤となりました。経済活動も支えるようになりました。

そしてその次にコンテンツが中心になるということは、ITが単なる道具や社会基盤ではなくて、その上に新たなメディア文化を創造する時代になったということです。今、我々は、ITによっていかなる文化を創造するかが問われています。

11. 文化創造学としての工学へ

私は大学では工学部にありますが、最近このように思うようになりました。工学は理系の一分野とみなされて理工学と呼ばれているけれども、これからはむしろ文化創造学という位置づけをすべきなのではないかと。

もともと工学には二つの顔がありました。その一つは物理学や化学を中心とする理学的な方法論をベースにして発展してきた応用理学としての工学です。そしてもう一つが、人間や社会のための文化創造学としての工学です（図7）。

ある時期、こういう言い方をしたことがあります。もし学問体系が、強引に自然学と人間学に分かれるとしたら、工学は人間学に属すのではないかと。自然学は、物理や化学、そして宇宙、要するに人間がいなくても成り立つ学問体系です。

これに対して、人間がいることを前提に成り立つ学問が人間学です。その意味では、工学は明らかに人間学です。人間がいなければ工学はまったく意味がない。むしろ、そのように工学をとらえて、人間学、あるいは文化創造学としての工学を追求すべきではないか。これが工学者としての私の立場です。少なくとも、そのような意識で50代を過ごしてきました。

図7 工学の二つの顔

12. 映像情報メディア再考

～テレビはきずなとなれるか？～

さて、そうこうしてくるうちに、私も還暦を迎え、60代になりました。人生も残り少なくなってきました。この講演も残り時間が少なくなってきました。

最後に、還暦を迎えてもまだ私の中で解決できていない問題を紹介して終わりにしましょう。

映像情報メディアに代表されるITは、いま時代の旬です。これから少なくとも10年、20年は旬の時代が続くでしょう。そして、それは新しい形のメディア文化を生み出していくことでしょう。

しかし、「この方向だけで果たして良いのだろうか」という自問自答を、私はいつも繰り返しています。これは私の技術者としての限界なのかも知れません。

その一つとしてこういうことがございました。先ほどお話しした未来型テレビ研究会で、海外調査団が組織され、私が団長でアメリカを中心に視察旅行をしたときのことで、ある放送会社で、技術担当副社長に私はこういう質問をしました。

「これからのテレビはコンピュータと結びついてパーソナル化に向かっていくでしょう。あなたはそれについてどう思いますか」

これに対する副社長の答えを、今でもはっきり覚えています。

「一般論として言えば、おまえの言うとおりである。テレビはパーソナル化に向かっていくであろう。でも、自分は放送とともにずっと歩んできた。放送人としては、パーソナル化は自分が目指してきた方向ではない。興味がない。むしろ、テレビは家族のきずなになって欲しいと願ってきた。ところがいまのテレビは、家族をバラバラにする方向に進んでいる」

13. マルチメディア時代のテレビの役割

このインタビューは、私の中でずっと気になって残っていました。関連して5年後に書いた原稿があります。

1995年の1月号に、テレビジョン学会誌で「マルチメディア時代のテレビの役割」という特集が組まれました。その総論の執筆を依頼されました。そこで「私論のような総論」という変なタイトルをつけて、自分の未解決の課題を述べることにしました(図8)。

「マルチメディア時代のテレビの役割」の総論ですから、普通はテレビのマルチメディア化の方向を概観することになりますが、そこでは少し違う立場で執筆しました。

それは、通信やコンピュータなど世の中がすべてマルチメディアへ向かっていくときに、テレビも付和雷同して同じようにマルチメディア化したら、面白くないではないか。

特 集 マルチメディア時代のテレビの役割

1. 私論のような総論

正会員 原 島 博¹

1. ま え が き

マルチメディアの時代を迎えて、これからのテレビはどのような方向へ向かうのか、単なる未来予測ではなく、マルチメディア時代に、テレビはどのような役割を担うべきなのか、そのイメージは？、問題点は？、課題は？、これが「マルチメディア時代におけるテレビの役割」と題されたこの特集の趣旨である。編集委員会から、その総論のようなものを執筆するように依頼されて、しばらく考え込んでしまった。実は、筆者の中に一見正反対にも思える2通りの考えが交錯していたからである。

ア時代におけるテレビの役割」なのである。

新しい時代の流れに乗り遅れないようにテレビもマルチメディア化するべきなのか、あるいは、テレビの独自の役割を主張すべきなのか、結局、決断ができないまま締切に迫られて執筆しなければならなかった。結果的に、筆者の迷いをそのまま記すことが問題提起になるのではないか思い、両論併記になってしまったが、あらかじめお許し頂ければ幸いである。

2. マルチメディア時代にはテレビ放送も……

マルチメディアとは、映像や音響、音声、図形、文字などの情報表現メディアを自由に駆使できる情報環

図8 テレビジョン学会誌(1995年1月号)

もともと、テレビは他のメディアにはない独自の役割を担っているのではないか。マルチメディア時代だからこそ、テレビはその本来の役割を果たすべきではないかという問題意識です。

内容を簡単に、キーワードだけ紹介させていただくと、まず「癒しのメディアとしてのテレビ」。夏の夜、湯上がりにナイターを見ながらビールを一杯。そのようなテレビです。疲れて帰宅したときにほっとするようなテレビ。これはインターネット、パソコンだとなかなかこういう気分にはなりません。

「環境としてのテレビ」、これは、ひとり暮らしの下宿に帰ったら、明かりと同時に、とりあえずテレビのスイッチもつけるという形でのテレビです。内容には関係なく映像が映っていないと何か寂しい。そのようなテレビです。

要するに「ながらテレビ」です。当時はマルチメディア全盛でしたから、むしろそのようなテレビの見方はよくないという議論が中心でした。よりメディアに対して主体的にならねばならないと叫ばれていました。

私は逆に「ながらテレビ」こそ、テレビの一つの本質的なではないかと思いました。その一つの効用に、「無指向性アンテナとしてのテレビ」があります。とりあえずテレビをつけっぱなしにしておくと、自分が見たいニュースだけでなく、見るつもりがなかった、あるいは見たくないニュースも飛び込んでくる。これは、テレビの役割として重要なことだと思っています。

人間の視覚では中心視と周辺視がありますが、中心視はインターネットでいいかもしれません。問題は無意識に幅広い情報を入力できる周辺視をどのメディアが担うかです。そこにテレビの役割があるようにも思います。

そして、もう一つが「家族のきずなとしてのテレビ」です。実はこれについては、この原稿でも問題提起にとどめました。これからのテレビに、本当にそれは可能なのだろうかという疑問が常に残っていたからです。

14. 「かけがえのない文化」と「かけがえのある文化」

関連して、最後にもう一つ、述べさせていただきます。これは、大学の講義で学生へ発している質問です。

「今、あなたの隣に恋人がいる。あなたにとっても優しくしてくれている。でも、その恋人は本物そっくりのコピーロボット。本物とまったく違う。そしてその本物は、別のひととデートしている。あなたはそれで満足できますか？」

満足できるという人もいますが、かなりの人からやはり嫌だという答えが返ってきます。それはどうしてなのでしょう。

私自身はこう思います。世の中の、たった一人の「かけがえのない」大切な人が、今、自分の横にいてくれる。そのたった一人のかけがえのない人が、自分一人のためだけに、自分のすぐ横で、時間と空間を共有してくれている。これがうれしい。

本物は別のところにて、コピーロボットを100体つけて、自分はその1/100ではうれしくない。コピーロボットは、何体でも複製できるという意味で「かけがえがある」ものです。かけがえのあるものには価値がない、うれしくない、そういうことかと思えます。

このような観点からは、我々が大切にしているデジタルは一体どういうことになるのでしょうか。デジタルの一番重要な特徴は、基本的にコピーが自由だということです。コピーが何回でもできる。品質も劣化しない。だからこそ、遠くの相手に送るときは、デジタルがいい。デジタル放送がいい。もちろん、著作権の問題も生じますが、基本的にデジタルの本質はこれです。

コピーが何回でもできるというのは、かけがえがあることです。元が壊れても、コピーしたものがあれば、本物と同じものがそこにあるという意味で、かけがえがある世界です。それを前提として、サイバーワールドにおいてその恩恵を受ける文化が、デジタル文化だろうと私は基本的に思っています。

一方で、リアルワールドは、かけがえのないものがある世界です。かけがえのないものの代表は命でしょう。そしてその命が生きている自然です。人間世界ももともとはかけがえのない世界だったはずで。

ところが、いま世の中はデジタルへ向かっています。ITは、かけがえのあるものを中心とするデジタル文化を構築しています。そのような時代に、もともとリアルワールドにあったかけがえのないものをどのように位置づけ、大切にしていけばよいのでしょうか。いまそれが問われています。

15. むすび

以上、恥ずかしい講演をしてしまいました。自分自身のことを語ると言うことはむずかしいものです。過去のことはどうしても美化されます。もしかしら本当はそうではないのに美化された自慢話になってしまった部分もあるかも知れません。あるいは、まったく私自身のなかで未解決な問題を生煮えの形でお話ししてしまい、皆様を混乱させたかもしれません。どうぞお許し下さい。

2005年秋に、私は還暦になりました。これから60代の人生が始まります。還暦は人生でいえリセットです。もう一度ゼロから初心に立ち戻って、自分が本当にやりたかったことは何かを思い起こし、新鮮な気持ちで勉強を続けていきたいと思っています。

これからもご指導の程を、どうかよろしくお願い致します。
(2006年8月16日受付)

〔文 献〕

- 1) David C. Moschella: "Waves of Power", AMACOM (1997) (佐々木浩二訳: "覇者の未来", IDGコミュニケーションズ)

原島 博 1945年生まれ → 現在に至る。